



だから “Joy耐”は やめられない!!

by TUBE 松本玲二



日本の音楽界を代表するメンバーでありながら、モータースポーツをこよなく愛するドライバー。それが、TUBEの松本玲二さんだ。バンドのボトムを支えるドラマーが握るアイテムがスティックからハンドルへと変わるとき、レーサーとしての血が騒ぎ出すようだ。



6年連続“Joy耐”に参戦決定!

「この時期は忙しいので、“お願いだから仕事が入らないでくれ”って折っているんですよ。僕のレース活動を優先して、仕事のスケジュールが決まることはありませんから。エントリーできるかどうか、本当にドキドキしているんです(笑)」

国内のトップミュージシャン、TUBEのドラマーとして活躍している松本玲二さんにとっては、1年の中で“夏”という季節が最も忙しくなる時期になる。その理由はあえて明記しなくても、ほとんどの人が想像できるだろう。“夏”を強くイメージさせる楽曲で人気を集めるTUBEにとっては、暑くなるこれからの季節が、その活動の最盛期であり、それこそ、“Joy耐”が開催されてきたこの季節こそ、松本さんにとっては冒頭の言葉へと続く鬼門なのである。

「でもね、それって他のエントラントの方々とも変わらないと思うんですよ。皆さんも、練習の時間を見ついたり、ましてや本番のレースだって仕事があって参加できないことがあるでしょう? それでも、きちんと仕事をこなしつつ、走る時間を見つけて参加しているということは、誰も変わらないと思うんですよ。僕だって、メン

バーから、“レースばかり夢中になるな”って言われないように気をつけていますから(笑)」

2輪から4輪へと転向した理由

松本さんはもともとバイクが好きな少年だった。初めてのレース参戦は中学生のときのモトクロス。TUBEとしてデビューした直後もミニバイクレースに参戦。その後、ロードレースへとステップアップしていったが、'93年に一度2輪でのレース活動を中止。その後、'97年にサンデーレースで復活し、しかも、全日本ロードレース選手権では「RT TUBE RIDER'S」の監督として、チームを率いチャンピオン争いを繰り広げていた。「バイクで転倒したときに幸い怪我はしなかったんですが、危険だなという意識が出てきて、一度バイクレースをやめたんです。それが'93年でした。その当時は、自分の実力が少しずつステップアップしていた時期だったので、入賞や勝負に対してのこだわりが強くなっていったんですね。でも、それで転倒して怪我をすることは絶対にしなくなりました。だから、その後にレースを再開したときは、勝負にこだわらなくても楽しめるサンデーレースに変更しました。」

そして、ちょうどこの時期に、昔から興味か

あった4輪に足を踏み入れるきっかけが訪れていた。知人から購入したHondaインテグラタイプRでスポーツ走行や走行会に参加。そこである程度の経験を積んでから4輪の草レースに参戦開始。今度はそれが、今に至る4輪レースへの経歴へと繋がったのだ。

「月に最低1回は走っていたいんです。いろいろと練習しないと、分からないことってたくさんあるから。でも、仕事があるとなかなかその時間が作れない。ましてや、練習もしないで突然レースに参戦してしまうと、レーススピードに自分の目がついていないのが分かるんですよ。だから、できるだけ目を慣らしておくことが重要だと思うんです。実はこの考え方で、バイクレースをしていたときからずっと思っていたことで、しかも、バイクでの練習時間もとれないのなら、4輪でもいいから練習を重ねて目を慣らしておきたいと考えたことが、4輪レース参戦へのきっかけだったんですよ。」

その後、'99年には初のJAF戦としてN1耐久レースにチャレンジ。しかも、その当時はまだライセンスも取得していなかったため、急遽鈴鹿サーキットまで足を運び、エンジョイAライセンスに参加して取得。翌'00年には、人気DJのピストン

勝負事なんだけど、“Joy耐”にはそれだけじゃない何かがある。

Special Interview

featuring Ryoji Matsumoto

だから“Joy耐”は
やめられない!!



西沢氏とペアを組みN1に参戦。そして、タイミングよく'01年から“Joy耐”がスタート。N1マシンを所有していたこと、耐久レースが好きだったことから、すぐに“Joy耐”参戦を決意。記念すべき初年度には、ピストン西沢氏と2輪ライダーの宮城光氏とチームを結成し参戦した。「耐久レースが好きになったのは、“もて耐”がきっかけでしたね。実は僕、“もて耐”でもチームを作って参戦したり、一度だけライダーとして走ったんですよ。その時に、2輪のレースは中途半端なレベルでは走れないと実感したんです。もっと練習しないと楽しめないって。だからって、4輪は中途半端でも楽しめるって意味じゃないですよ。ただ、4輪で同じようなイベントがあれば、たくさん走行できるからそこで経験値を積むことができるし、お祭りみたいで楽しそうじゃないですか。そんな事を考えていたら、“Joy耐”がタイミングよく始まったんですよ!」

“Joy耐”のおもしろさとは?

このようないきさつの中で、6年連続参戦が決定。今年も無事(?)“Joy耐”への門を開いたことになった。レースが好きだからというのは当然だが、ここまで“Joy耐”にこだわる、松本氏を引きつける魅力は一体どこにあるのだろうか?

「耐久レースのおもしろさは、総合力が重要という部分ですね。ドライバーが速いだけでは、絶対に勝てない。もちろんスプリントだって同じなんですけど、その比重が大きいような気がします。しかも、“Joy耐”の場合は、速くてタイムが良かったとしても燃費が悪いとダメ。もちろん、その逆もダメ。この相反する要素で、いかにベストバランスを見つけるのが大変ですからね。しかも、全てが上手く噛み合っていないと良い結果は生まれません。レースってスポーツだと思うんです。マシンが無ければ参加できないけど、最終的には人間がやる行為がすべて反映されるわけですから。セットアップもドライビングに関しても、そして結果に関してもね。それらを一つずつクリアしていくプロセスも、“Joy耐”をやめられない理由の一つに間違いないですね。」

ドラマーとしてトップミュージシャンの位置に上り詰めた松本さんだけに、レース活動においてもその探求心はとどまることを知らない。そして、それがレース活動を続けるモチベーションへと繋がっているのだ。



■取材協力
Far Side Cafe (ファーサイドカフェ)
〒242-0028 神奈川県大和市榎森2-26-18
Tel: 046-264-7631
URL: <http://www.farsidecafe.com>
E-mail: info@farsidecafe.com

松本氏と氏が顔を合わせるというこのお店は、モーターサイクルショップが中心の場所と見受けられている。

「最近、一生勉強するという意味では、ドラムもレースも一緒だなんて感じるんです。いつまでたっても、これでオーケーという場所がないんですよ。ドラムだって、今日は良かったけど、明日は良くないことがあるかもしれない。でも、それを平均して安定させていくことは難しい。そして、それは、ドライビングも一緒なんです。だからこそ、日々の練習が重要になってくるんですけど……ドラムは練習できてもサーキット走行は簡単にはできませんから。それは、みんな同じ

条件だからしょうがないですけどね(笑)」

楽しみつつ真剣に参戦しているからこそ、実感した自身の仕事とレース活動の相似点。共に奥が深い部分をいつまでも追求していく気持ちが、松本さんがレース活動を続ける根本的な理由となっているのだ。そこから沸き上がる闘志やレースにかける情熱は、今年の“Joy耐”でも見せてくれるに違いない。TUBEのドラマーではなく、レーシングドライバーとしての松本玲二さんの活躍を、ぜひとも楽しみにしてほしい。



Profile | 松本玲二

1985年TUBEのドラマーとして、メジャーデビュー。「シーズン・イン・ザ・サン」、「サマー・ドリーム」、「あー夏休み」など数々の名曲を生み出し、国内を代表するトップミュージシャンとして活躍中。ドライバーとしては、1993年よりレース活動を開始。“Joy耐”初年度から参戦して、2003年には3位を獲得。また、5輪ドライバーとして、昨年の5耐最終戦でもクラウンで、ピストン西沢氏とペアを組みクラス優勝も果たした。